

1. 国語科論文

自ら学び続ける授業の創造Ⅲ

自分のことばを求め続ける国語科授業の創造Ⅲ ～ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導～



I 研究の立場	15
1 研究の歩み	15
2 本年度の研究の方向	16
II 本年度の研究内容	17
1 ことばで伝え合う喜びを実感するとは	17
2 ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導とは	17
3 ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導の具体化	18
(1) ことばで伝え合う喜びを実感する学習内容	18
(2) ことばで伝え合う喜びを実感する指導方法	18
III 授業プラン例	21
1 第4学年「材料の選び方を考えよう」	21
(教材「アップとルーズで伝える」「四年三組から発信します」)	
2 第1学年「こたえをかんがえながらよもう」	23
(教材「いろいろなくちばし」)	
IV 研究の成果と課題	25
1 研究の成果	25
2 研究の課題	25

I 研究の立場

1 研究の歩み

私たちは、子どもたちが意欲的に自分の伝えたい内容を持ち、その伝えたい内容にぴったりで、相手に伝えるのにもぴったりなことばを求め続ける子どもを育てたいと考えてきた。「ことば」とは、人々が感情や意志、考えなどを伝えるために用いる音声や文字に、相手に自分の伝えたいことがしっかりと伝わるようにという気持ちまでが合わさっているものだと考える。そして、自分の伝えたいことが、相手にしっかりと伝わるように考え、表現したことを「自分のことば」と考えた。そこで、「自分のことばを求め続ける国語科授業の創造」という研究主題を設定し、自分が伝えたいことを相手に伝えるために、よりよいことばを絶えず求めている授業を目指し、研究を進めてきた。

本研究の1年次には、**目指す子どもの姿や授業像を明らかにした。**

「自分のことばを求め続ける」とは、図1のように一連の過程及び結果を表すと考えた。子どもたちは、まず対象と出会い、自分の伝えたいことをもつ。この伝えたいことをもつ場合には、頭の中で、過去の経験から得た「知識、技能」と「思考力・判断力・表現力（理由付けの仕方）」（以下、「理由付けの仕方」）を使っている。次に、自分の伝えたいことを伝える。自分の伝えたいことを伝える際にも、先ほど頭の中で考え作ったものをそのまま伝えてはいない。相手に伝えたいという「関心・意欲、態度」をもち、相手や目的に応じて、「知識、技能」や「理由付けの仕方」を働かせ、適切なことばを探し出して伝えている。

これらの過程は単元全体や1時間の授業を通して見られる姿であり、子どもたちが伝えたいことを伝えようとする瞬間の姿でも考えている。

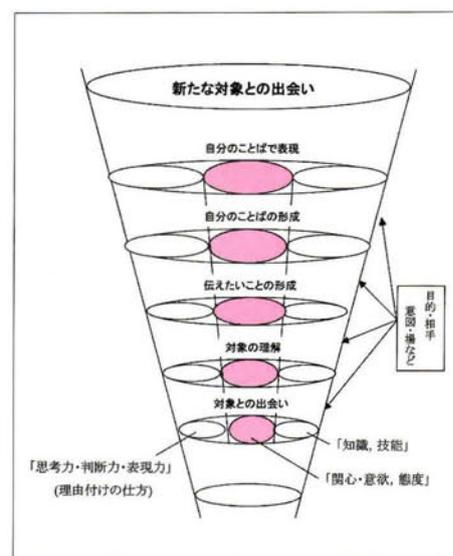
そして、「自分のことばを求め続ける国語科授業」とは、「関心・意欲、態度」と「知識、技能」、「理由付けの仕方」が絡まり、よりよい自分のことばを絶えず求めている授業であると考えた。

2年次は、学習内容として、**効果的な書く活動を、単元の中の効果的な位置に位置付ける設定の手順と方法を明らかにした。**

まず、単元の目標、書く活動の目的を明らかにする。そして、学習指導要領解説の「書くこと」の領域における指導事項と、本校の研究で設定した「理由付けの仕方」の系統一覧、子どもの学習経験を考慮して、書く内容を決定する。また、「知識、技能」と「理由付けの仕方」が表れやすい型式として、1枚カード型式、順番カード型式、構成型式（1枚型）、構成型式（複数型）のどれが妥当であるかを考えて設定する。対象としては、低学年はより身近なものを、高学年になるにつれて、社会的な広がりをもつものと考えて設定する。そして、それを書く活動の目的に応じて、指導計画へ位置付けてきた。

さらに、**育成したい三つの力がしっかりと身に付いているかを見取る評価方法の具体化**を図り、作品分析・自己評価の有効性を明らかにした。

その結果、自分の伝えたいことにぴったりな自分のことばで書く子どもの姿が見られるようになってきた。



【図1 自分のことばを求め続ける姿】

2 本年度の研究の方向

本年度の研究は、「自分のことばを求め続ける国語科授業の創造」の3年次である。

これまでの授業実践を振り返ると、適切な言語活動として効果的な書く活動を学習内容として位置付け、育成したい三つの力を高めることができた。しかし、自分のことばで書けたことに満足し、自分が伝えたい内容を正確に相手に伝えることができた子どもが感じているかという点、十分ではないと考える。

例えば、第2学年「だいじなところに気をつけて読もう」（教材「サンゴの海の生きものたち」）の実践で考えてみる。この単元は、生き物の生態と関わり合いの理由の順序を考えながら、内容の大体を読み取る単元である。そこで、何をどのように表現しているのか教材文で学習した後、選んだ生き物についての科学的読み物を読み、カードにまとめるという学習を行った。子どもたちは、生き物の特徴を読み、それを自分のことばでカードに書くことができ、「知識、技能」「理由付けの仕方」を高めることができた。

しかし、「これでよかったのかな。」「自分の発表はどうだったかな。」という子どもの声も聞こえてきた。このことは、学習したことを生かして書けているという自信をもつことができなかつたり、相手に分かりやすく伝えることができたのかははっきりととらえることができなかつたりしたからだと考える。それは、効果的な書く活動で書いた作品を発表するだけで、自分のことばを再考したり、発表を聞いた側のことばを伝えたりする活動を子どもたちが意識していなかったからだにとらえた。

そこで、これまでの2年間の研究を基に、効果的な書く活動で的確に理解したことを基にして、自分の考えを自分のことばで伝え合い、その喜びを実感させることが大切であると考えた。ことばで伝え合うことによって、身に付けさせたい「知識、技能」「理由付けの仕方」を子ども自身が意識しながら、書いたものから「学習したことを生かして書けた。」「相手に分かりやすく伝えることができた。」という思いを持ち、「関心・意欲、態度」を高めることができると考える。

また、小学校学習指導要領の改訂の基本的な考え方の一つとして、思考力・判断力・表現力等の育成が挙げられている。その中で、「体験から感じ取ったことを表現する」、「事実を正確に理解し伝達する」、「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる」などの学習活動の重要性が述べられている。また、今回の改訂で充実すべき重要事項の一つとして、言語活動の充実が挙げられ、発達段階に応じて記録、報告、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要性があると述べられている。このように新学習指導要領等の考え方からも、学習内容を見直し、指導方法を充実させていく必要があると考える。

以上のことから、私たちは、ことばで伝え合う喜びを実感させることで、自分のことばを求め続ける子どもを育成することができると考え、ことばで伝え合う喜びを実感させる学習指導を明らかにすることが大切であるととらえた。そして、以下のようなサブテーマを設定した。

**自分のことばを求め続ける国語科授業の創造Ⅲ
～ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導～**

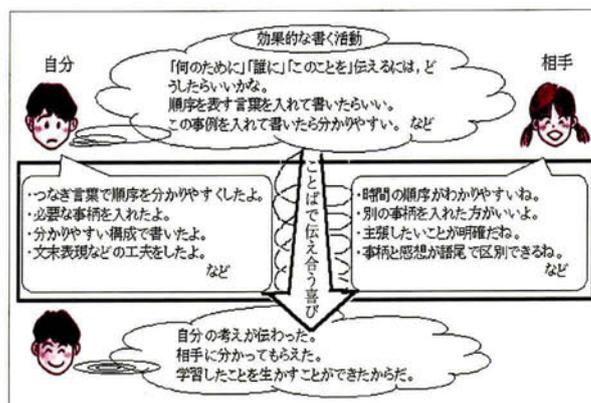
II 本年度の研究内容

1 ことばで伝え合う喜びを実感するとは

子どもたちは、これまでの学習・生活経験から自分の伝えたいことを、相手や目的などに応じて、分かりやすく自分のことばで書こうとしていた。そして、自分が伝えたいことが自分のことばで正確に伝わったことを感じると、意欲的に自分の伝えたい内容を持ち、自分のことばを求め続ける。それは、お互いの考えのやりとりを通してことばを吟味すると、自分が伝えたいことがはっきりし、相手に伝えたいと思う「関心・意欲、態度」が高まるからだと考える。

ことばで伝え合う際には、効果的な書く活動で書いた自分のことばで話したり、読んでもらったりするだけでなく、それに対する相手の考えを聞いたり、相手の書いた文章を読んだりして、自分のことばを再考したり、学習してきた過程を振り返ったりすることが大切である。

そして、自分のことばが伝えたいことになったりなことばであることを実際に感じるこ



【図2 ことばで伝え合う喜びを実感する姿】

とができた時を、ことばで伝え合う喜びを実感する姿であるにとらえた。

その姿を学ぶ意欲の基になる感覚でとらえると、次のような姿などで見ることができる。

自分のことばで、伝えたい内容が相手に分かってもらえたときに、子どもたちは自分のことばでより正しく、より確かに伝えられたという有能感を感じる。また、相手とのやりとりを通して、なかなか相手に分かってもらえないときに自分のことばでより分かりやすく伝えなければならないという必要感を感じる。そして、相手のことばからとらえた自分の考えが伝えたい内容と合致したときに、自分のことばが相手に認められたという受容感や自分のことばが正しかったのだという有用感を感じる。さらに、ことばで伝え合うことにより、学習したことが生かされて、より分かりやすい自分のことばが形成され、表現されたという効力感も感じることができる。

ことばで伝え合う喜びを実感する子どもとは、このような学ぶ意欲の基になる感覚を感じ、自分のことばを求め続けていく子どもであると考えた。

2 ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導とは

これまでの学習指導で、子どもたちの姿が想定どおりでなかった場合を、学ぶ意欲の基になる感覚でとらえ直してみた。すると、「知識、技能」、「理由付けの仕方」を生かして自分のことばで書けたという効力感や、自分の伝えたいことが相手に伝わったという受容感を味わわせることが不足していたと感じる。

それは、効果的な書く活動で書いた自分のことばを発表する学習指導で、自分のことばが「知識、技能」、「理由付けの仕方」を生かして書けているのかが把握できず、効力感を味わうことができない子どもが見られたことから言える。また、発表する際に自分のことばを伝えるだけで、相手に自分の伝えたい内容を理解してもらえたかが分からずに、受容感を味わうことができない子どもが見られたことから言える。

そこで、単元全体や1時間の授業で学習している「知識、技能」「理由付けの仕方」

を子ども自身が明確にとらえて効果的な書く活動で、書いたものをことばで伝え合う活動を設定し、効力感を味わわせることが必要であると考え。また、伝えたいことが相手に正しく伝わったと確認できるようなことばで伝え合う活動を設定し、受容感を味わわせることが大切であると考え。ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導とは、効力感・受容感を味わわせ、育成したい三つの力を高める学習内容や指導方法のことである。その指導方法においては、学習過程・学習活動・学習形態・学習の場・教師の具体的な働きかけ・評価方法などが関連付けられて構成されなければならないと考える。

3 ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導の具体化

(1) ことばで伝え合う喜びを実感する学習内容

これまでの研究で、学習内容として位置付けてきた効果的な書く活動を、ことばで伝え合う喜びを実感するという観点で見直した。

その結果、効果的な書く活動で書いた自分のことばを、伝えたい相手の立場で、目的や意図に応じて吟味できる対象と内容、自分のことばを再考したり、学習した過程を振り返ったりすることのできるようなモデルを基にした型式への書かせ方などを考慮し、ことばで伝え合う学習内容を設定することが必要であると考えた。図3は、第4学年「材料の選び方を考えよう」(教材「アップとルーズで考える」「四年三組から発信します」)の実践で見直した例である。

これまでの学習内容	ことばで伝え合う喜びを実感する学習内容
「相手や目的に応じた新聞をつくらう。」 ○ 教材文や教師の提示したモデルでの学習 ○ 効果的な書く活動 一人一人の取材・構成・記述・推敲 「自分たちでつくった新聞をしようかいしよう。」	「 <u>集団的学習について</u> 、3年生に分かりやすく伝えよう。」 ○ 教材文や教師の提示したモデルでの学習 ○ 効果的な書く活動 ※ <u>異テーマ・同テーマグループでの取材や推敲での伝え合い</u> 「 <u>新聞発表会で、友達の手を見付けよう。</u> 」

【図3 これまでの学習内容との比較】

(2) ことばで伝え合う喜びを実感する指導方法

これまでの授業の実践を踏まえて、効果的な書く活動で書いたことばを伝え合い、自分のことばを再考したり、学習してきた過程を振り返ったりすることが大切であると考え。そこで、子どもが主体的に学習に取り組んでいけるように、効力感・受容感を味わわせることのできることばで伝え合う喜びを実感する指導方法の視点の基本的な考え方を次のように設定した。

【表1 ことばで伝え合う喜びを実感する指導方法の視点の基本的な考え方】

指導方法の視点	基本的な考え方
学習過程	・ 子どもがことばについて認識する過程。「つかむ」「みとおす」「しらべる」「ふかめる」「ふりかえる」「いかす」の6つの段階に区分している。
学習活動	・ 学習を生かして自分の伝えたいことにぴったりの自分のことばを考え、効力感を味わうことのできる学習活動、そのことばを再考したり、振り返ったりして受容感を味わうことのできる伝え合う学習活動を設定する。
学習形態	・ 学習したことを生かしていると効力感を味わうことのできる個別学習や一斉学習と、お互いのことばを伝え合い、自分のことばを再考したり、振り返ったりして受容感を味わうことのできるグループ学習を組み合わせる。
学習の場	・ 学習を生かしてことばを調べたり、確かめたりして効力感を味わうことのできる言語環境・学習環境の整備を行う。また、ことばに対しての情報を得て、思考を深めることができるように、学校図書館との連携を図る。
教師の具体的な働きかけ	・ 子どもの学習経験や実態を的確に把握し、育成したい「知識、技能」が明確に示されて参考となるモデルを提示したり、発問・助言、板書等を工夫したりして効力感を味わわせる。また、適切なことばに対する声かけや称賛により受容感を味わわせる。
評価方法	・ 作品分析により、「知識、技能」「理由付けの仕方」を評価する。また、教師が見取ることが難しい「関心・意欲、態度」については、学習した内容を振り返り、自分の力として身に付いたかどうかを子ども自身が評価し、効力感を味わうことのできる自己評価を行う。 ・ 友達とお互いのことばを認め合い、受容感を味わうことのできる相互評価を行う。

この指導方法の視点で授業を創り、想定した子どもの姿が表出されているかを見取り、ことばで伝え合う喜びを実感する指導方法の要件を次のように設定した。

- 効果的な書く活動で書いた自分のことばで伝え合うことによって自分のことばを再考し、自分のことばの正誤・適否を判断し、付加・削除・修正することができる。
- 効果的な書く活動で書いた自分のことばで伝え合うことによって、「知識、技能」「理由付けの仕方」を子ども自身が意識することができる。
- 効果的な書く活動で書いた自分のことばで伝え合うことによって、自分のことばに自信をもち、さらに自分のことばを求め続けることができる。
- 効果的な書く活動で書いた自分のことばで伝え合うことによって、相手に分かってもらえた、認められたという気持ちをもつことができる。

この要件を基に、自分のことばを求め続ける際に対象と出会ってから自分のことばで表現するまでの「対象との出会い」「対象の理解」「伝えたいことの形成」「自分のことばの形成」「自分のことばで表現」で、学習過程・学習活動・学習形態・学習の場・教師の具体的な働きかけ・評価方法を関連付けて構成したものが表2である。

ことばで伝え合う際には、単元で、または、その時間に学習する「知識、技能」「理由付けの仕方」が表れているのかという観点を子ども自身に明確に持たせて、再考させたり、

【表2 ことばで伝え合う喜びを実感する指導方法の要件】

子どもの姿	過程	学習活動	学習形態・場
<p>【対象との出会い】【対象の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 対象について既習事項と関連付け、学習したことを生かして考える。 ○ 相手・目的意識を明確にし、学習目標を考える。 <p>【伝えたいことの形成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 内容や型式を明確にした学習の見通しを持つ。 <p>【自分のことばの形成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 叙述から根拠を明確にし、自分の考えを自分のことばで書いたり、話したりする。 <p>【自分のことばで表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 友達と伝え合うことにより、自分のことばがどのように伝わっているのかを確かめ、自分のことばを再考する。 <p>【新たな対象との出会い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自己の成長に気付き、獲得した「関心・意欲、態度」「理由付けの仕方」「知識、技能」を生かして、日常の言語生活に活用しようという意欲をもつ。 	<p>つかむ</p> <p>みとおす</p> <p>しらべる</p> <p>ふかめる</p> <p>ふりかえる</p> <p>いかす</p>	<p>1 ことばに対する見方・考え方を広げながら、学習目標を設定する。</p> <p>2 効果的な書く活動、伝え合う活動を位置付けた単元の見通しをもつ。</p> <p>3 学習課題に対する自分の考えを自分のことばで書く活動を行う。</p> <p>4 ことばで伝え合い、自分のことばを再考する。</p> <p>5 再考した自分のことばから、学習してきた過程を振り返り、自己の成長に気付く。</p> <p>6 新たに育成された三つの力を活用し、個の課題を追究する。</p>	<p>言語環境・学習環境の整備</p> <p>個 全体</p> <p>個 全体</p> <p>個 全体</p> <p>グループ</p> <p>個 全体</p> <p>グループ</p> <p>個 全体</p>

振り返らせたりすることのできる指導方法を考えることが重要である。このことによって、子どもが相手のことばを聞き、読み、比較して、自分のことばを再考したり、友達に自分のことばを説明し、振り返ったりすることで、「知識、技能」、「理由付けの仕方」をしっかりとらえ、学習したことを生かせたという効力感を味わうことができると考えるからである。

そこで、「知識、技能」「理由付けの仕方」を意識させて記述式の自己評価を行わせ、自分の成長に気付かせる。また、「関心・意欲、態度」については、学習の楽しさを4段階で数値化して評価させ、その理由を記述させることにより、次時の学習の指導に生かすことができるようにする。

また、「知識、技能」「理由付けの仕方」の評価の観点を明確にして、自分の伝えたいことが相手に伝わり、自分のことばが相手に理解され、認められたという受容感を味わうことのできる相互評価を行うことが大切である。子どもたちに効果的な書く活動で明確にした「知識、技能」「理由付けの仕方」の観点で伝え合うことを確認し、相手のよさを伝え合ったり、アドバイスし合ったりすることで、自分のことばに生かすことができることを意識させる。そして、自分のことばを客観的に見直すことができた子どもを教師が称賛することで、自分のことばを求め続けることを子ども自身が意識できると考える。

教師の具体的な働きかけ	評価方法
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然・社会・文化や人間の生き方にかかわり、発達段階に応じて興味もてる、また、一人一人が理解できる共通性のある対象について話題提示する。その際、多面的な見方・考え方・感じ方ができ、自分なりの相手・目的意識をもつことのできる資料を提示する。 ○ 効果的な書く活動の内容・型式について、学習経験や知っていることを想起させる発問をする。 ○ 育成したい三つの力を確かに身に付けることができる、条件を付加した内容・型式を考えたモデルを提示し、学習の見通しをもたせる。モデルは、発達段階や内容などによって、伝わりやすい例や伝わりにくい例などを単独、または組み合わせて提示する。 ○ 育成したい三つの力を確かに身に付けさせるために、効果的な書く活動を位置付ける。その際、「知識、技能」「理由付けの仕方」を確実に身に付けさせるために、書く内容を精選する。 ○ 効力感を味わわせるために、叙述の仕方や構成の工夫などの表現形式に着目させて書かせたり、話したりさせる。 ○ 受容感を味わわせるために、相手のことばのよさや、自分が受け止めた相手の考えを伝えさせる。その際、効果的な書く活動を行った時の観点に沿って、読んだり、聞いたりさせる。 ○ 効力感を味わわせるために、再考した自分のことばが分かるように修正させ、学習してきた過程の振り返りをさせる。 ○ 一人一人の考えの違いを、根拠の違いや理由付けの仕方の違いに着目させて話し合わせるために、思考の過程や相違点・共通点が見える構造的な板書を行う。 ○ 相手・目的に応じて、適切な方法・条件で学習することができたかを明確にもたせて、学習してきた過程を振り返らせる。 ○ 日常の言語生活に活用しようという効力感を味わわせるために、自己の成長に気付かせ、連続・発展できる学習内容について考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの学習経験から課題をとらえ、新たな知識・技能獲得への意欲をもとうとしているか。 〈自己評価〉 ○ 自分が伝えたいことを決め、学習の見通しをもつことができたか。 〈作品分析〉〈自己評価〉 ○ 根拠を明確にして、自分の考えを書くことができたか。 〈作品分析〉〈自己評価〉 ○ 自分の考えを相手に伝えようとしているか。 〈自己評価〉〈相互評価〉 ○ 効果的な書く活動で明確にした観点で友達と伝え合い、自分のことばを再考し、付加・削除・修正しているか。 〈作品分析〉〈自己評価〉 ○ 自分のことばを再考して修正したことばや作品を見直し、自己の成長に気付いているか。 〈自己評価〉〈相互評価〉 ○ 自己の成長に気付き、学習したことを活用しようという意欲をもっているか。〈自己評価〉

Ⅲ 授業プラン例

1 第4学年「材料の選び方を考えよう」（教材「アップとルーズで伝える」〔四年三組から発信します〕）

材料の選び方を考えよう（4年11月下旬）

教材「アップとルーズで伝える」〔四年三組から発信します〕〔光村4年下〕

1 単元の位置

3年

段落のつながりに気をつけて読もう
○ 中心となる語から見出しを考え、段落相互の関係をとらえる。

4年

大事なことを確かめよう
○ 中心となる語をとらえ見出しを考え、書こうとすることの中心を明確にして書く。

材料の選び方を考えよう
○ 中心となる語から段落相互の関係をとらえ、自分が伝えたいことに応じて材料を収集したり選択したりして書く。

目的に応じた伝え方をしよう
○ 効果的に読み、書く事柄を整理したり事象と感想、意見などを区別して書く。

5年

調べたことを知らせよう
○ 材料を収集・選択したり、段落相互の関係を考えて書く。

2 目標

- (1) 伝える相手や目的に応じて、情報の選び方や表現方法が異なっていることに気付き、友達の商品やアドバイスを自分の表現活動にも生かそうとすることができる。
- (2) 事例と事例を比較して、それぞれの相違点と共通点を明らかにすることができる。
- (3) ○ 中心となる語や文からアップとルーズの目的や特徴、段落相互の関係をとらえることができる。
○ 自分が伝えたい事や相手に応じて必要な材料を集めたり、必要に応じて選択したりして新聞を書くことができる。

6 指導計画(全17時間 書くこと10時間・読むこと7時間)

過程	主な学習活動	学習形態・場
つかむ	1 モデルの提示による学習への意欲の喚起と学習目標の設定 「どの新聞がわかりやすいだろうか。」 ・3種類の新聞比較 ・写真の効果の考察 ・宿泊学習の想起 ・単元の目標の設定 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;"> 集団宿泊学習について、3年生に分かりやすく伝えよう。 </div>	㉞ 材料の選び方に関心をもたせるために、掲示した新聞を 全体 で見たり、 個人 で見たりする。 ㉟ 集団宿泊学習の際、活用したしおりを準備する。
みとおす	2 学習計画の立案 「学習計画を立てよう。」 ↓	
しらべる	3～5 「アップとルーズで伝える」の段落の読み取り 「アップとルーズはどのような特徴があるのだろうか。」 ・アップとルーズの特徴の読み取り 6 「段落構成はどのようなになっているのだろうか。」 ・カードへの書き込み ・段落構成の把握 7 アップとルーズの実際 「身の回りでは、アップとルーズがどのように使われているのだろうか。」 ↓	㉞ アップとルーズの長所や短所に気付かせるために、写真を掲示し文章との関連を考えさせる。 ㉟ 段落の構成をつかませるために、段落カードを 個人 で並べたり、掲示用カードを 全体 で並べたりする。 ㊱ 身の回りのアップとルーズに目を向けさせるために、写真の使われているメディアやスポーツ番組等を準備する。 ㊲ 目的に応じた写真の活用を実感させるために、 異テーマグループ で自分の見付けた写真とそのよさを紹介し合う。 ㊳ 最適な材料を集めさせるために、 同テーマグループ ごとに集まり、伝えたいことに関連する材料を出し合う。
ふかめる	8～15 既習や体験を踏まえた新聞作成 「自分が伝えたい事を決め、取材をしよう。」 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;"> 施設の紹介 活動内容の紹介 注意点の紹介 等 </div> ・テーマ別グループの編成、取材 「どのような事例を取り上げればよいだろうか。」 ・事例の比較・決定 ・写真の決定 ・新聞型式の確認 「新聞を作成しよう。」 ・見出し、記事、割り付け等 ・内容に対応した写真の選定 「三年生に伝わりやすい新聞にするためには、どんなことを見直せばよいだろうか。」 ・下書きの発表 ・異テーマグループでのアドバイス <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;"> 新聞名と内容 事例の順序 写真等の適切性 見出し・記事の関連 文章表現 等 </div> 「新聞を仕上げよう。」 ↓	㊴ 伝えたい内容に最適な写真を選択させるために、集団宿泊学習で教師が撮影した写真を掲示する。
ふりかえる いかす	16～17 新聞発表会 「友達の工夫を見つけよう。」 ・ポスターセッションでの発表 ・視点に応じた相互評価	㊵ 伝わりやすい内容になっているかを考えさせるために、 異テーマグループ の友達に読んでもらい、感想を交流させる。

3 指導のポイント

(1) 内容的価値

「アップとルーズで伝える」では、日頃見ているテレビの映像や新聞の写真が送りの意図や目的によって取捨選択されていることを分かりやすく伝えている。「四年三組から発信します」では、既習や前教材での学習を生かし、材料を集めることを中心にした新聞作りが書かれている。

(2) 技能的価値

目的に応じた映像技法である「アップ」と「ルーズ」の目的や特徴が対比的に書かれている。「始め・中・終わり」という構成で、始めと中の段落構成を対比的に考えるのに適している。「四年三組から～」は前教材を生かして特に目的に応じた取材が書かれている。

4 効果的な書く活動と伝え合う活動の設定

自分が取材したことを分かりやすく伝える工夫のよさを感じさせるために、見出しや記事・写真を取り入れた1枚カード型式(新聞)に書かせる活動を、ふかめる過程に設定する。

相手に伝わりやすいかを考えさせたり、伝わる喜びを感じさせたりするために、お互いの作品を異・同テーマグループで見せ合う活動を、しらべる・ふかめる・ふりかえる過程に設定する。

5 評価規準

評価の観点	評価規準
関心・意欲、態度	身近なアップとルーズについて考えたり、伝えたいことを進んで決めたり、内容が伝わりやすいように写真を選んだり記事を書いたりすることができる。
理由付けの仕方	事例と事例を比較して、それぞれの相違点と共通点を明らかにし、伝えたい内容に最適な事例を選ぶ。
知識・技能	アップとルーズの特徴を表す文を見付け、それを基に段落の構成(始め・中・終わり)や段落構成の類似点を理解する。 伝えたいことに関する材料を集め、その中から最適な材料を選択することができる。

教師の具体的な働きかけ・評価方法

- 日頃、ポスターや教材に使われている写真に目を向けていることはあまりない。そこで材料選びの大切さに気付かせるために、内容と対応していない写真を掲載した新聞と内容と対応している写真を掲載した新聞を比較させ、伝わりにくい根拠を発表させる。
- 学校の中のことを記事に取り上げても、子どもたちの意欲が高まりにくい。そこで、目的意識や相手意識を明確にさせるために、3年生に集団宿泊学習の楽しさや配慮点等を伝えることを提案する。
- 本教材は問いの部分が冒頭になく、意識されにくい。そこで、1～3段落に何が書かれているのかを、丁寧に読み取らせる。
- アップとルーズのそれぞれの長所や短所に気付かせるために、それぞれが書かれている部分にサイドラインを引かせる。また、どの部分から短所と長所が書かれているかに着目させ、「しかし」「でも」という言葉に気付かせる。【写真1】
- ④ 段落の中心をとらえさせるために、「このように」等に着目させ、段落毎に小見出しを付けさせる。(観察)
- 段落の構成を明確にさせるために、個人で考えた構成を基に全体で考えさせ、構造的に板書する。【写真2】
- 学習内容を理解した効力感を感じさせるために、アップとルーズを身近な事例から探し出させ、伝えたい事に対する写真の効果をお互いに意見交換させる。【写真3】
- 一人での作成では、自信をもてない場合がある。そこで、受容感を高めさせるために、内容の同じグループを編成させる。
- ④ 伝えたい内容を的確に伝えさせるために、伝えたい事に関する事例を数多く出させ、その中から最適と考えられる材料を選択させる。さらに、選んだ事例や写真の適切さを同テーマグループで検討させる。(作品分析)
- 新聞の特徴を思い出せない場合が見られるので、1学期の新聞作成の学習を振り返らせ、見出しや対応する記事、割り付けの工夫を確認させる。
- ④ 相手により伝わりやすい新聞にさせるために、下書きした新聞を、異テーマグループ内で発表させ、お互いにアドバイスさせる。その際、見出しと記事の関連や写真・挿絵の妥当性を中心にアドバイスさせたり、よい点を認め合ったりさせる。(相互評価)
- 推敲のよさを感じさせるために、見直す前と後での新聞の伝わりやすさについて発表させる。【写真4】
- ④ アドバイスや自分らの評価を基に、下書きを書き直し、清書させる。(作品分析)
- ④ 発表では多くの作品を見られない。そこで、ポスターセッションスタイルでの発表をさせ、新聞作成の観点で、お互いのよさを称賛させ合う。(相互評価)
- ④ 新聞を作成したことへの楽しさを数値化させたり、その理由を記述式で書かせたりする。(自己評価)



写真1：第5時板書例



写真2：第6時板書例



写真3：第7時活動の様子

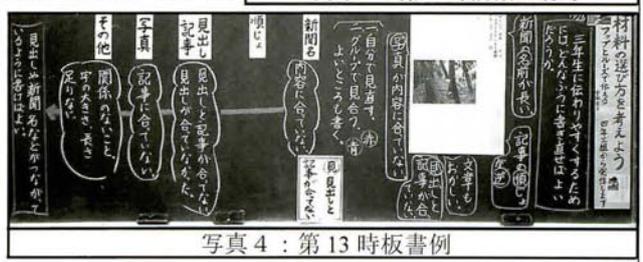


写真4：第13時板書例

2 第1学年「こたえをかんがえながらよもう」（教材「いろいろなくちばし」）

こたえをかんがながらよもう（1年6月中旬）
教材「いろいろなくちばし」(光村1年上)

1 単元の位置

1年

はなのみち

○ 主人公の行動を考える中で内容の大体を読み取る，絵と文や場面と場面を対応させて読む。

こたえをかんがえながらよもう

○ 問いと答えの関係に着目し，内容の大体を読んだり，問いと答えを考えて書いたりする。

くらべてよもう

○ 働きとつくりの関係などを考えながら内容の大体を読んだり，書いたりする。

2年

じゅんじよに気をつけてよもう

○ 時間的な順序，様子とわけなどを考えながら読む。

2 目標

- (1) 鳥のくちばしに関するクイズを作るということに興味をもち，問いと答えやその順序を確かめたり，語のまとまりを意識して進んで読んだりすることができる。
- (2) 教材文同士や文と写真とを比較して，問いや答えがあることやその順序性をとらえ，自分なりのクイズを作ることができる。
- (3) 問いと答えの内容や順序，文と写真の対応を考えながら，話の内容の大体を読むことができる。

6 指導計画(全8時間 読むこと8時間)

学習過程	主な学習活動	学習形態・場
つかむ	<p>1 身近な動物への関心の高まりによる教材への興味の喚起 「この とりの なまえは なんでしょう。」 ・知っている鳥の発表 ・鳥の名前当てクイズ</p> <p>2 自作クイズ作りによる課題把握と単元の目標設定 「とりの くちばし くいずをつくろう。」 ・鳥の選択とクイズ作り ・課題把握</p>	<p>㊦ クイズを楽しんだり，クイズ作りの課題を明確にさせるために，全体でクイズ大会を実施する。</p> <p>㊧ 鳥のくちばしに対する関心を高めさせるために，教材に掲載されている鳥の写真を掲示する。</p>
みとおす	<p>くいずをつくるには，どんなことがひつようだろうか。</p>	
しらべる	<p>3～5 問いや答え，順序についての意識化と理解 「きつつきの くいずをつくろう。」 ・音読 ・視写 ・問いや答えの意識化 ・クイズ作り 「おうむや はちどりの くいずをつくろう。」 ・音読 ・視写 ・クイズ作り ・教材文，自作クイズの内容比較</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>さきがするどくとがったくちばしです。 これは，なんのくちばしでしょう。</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">⇔</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>ふとくてさきがまがつたくちばしです。 これは，なんのくちばしでしょう。</p> </div> </div> <p>「三つの とりの くいずをつくろう。」 ヒント作り</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>さきがするどくとがったくちばし。</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">⇒</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>くぎみたいにとがったくちばし。</p> </div> </div>	<p>㊨ 問いと答えのまとまりを意識させるために，囲んだ部分を隣同士で確認させる。</p> <p>㊩ 教材文の問いと答えの順序を入れ替えられるようにするために，まとまりごとに短冊に書き，掲示する。</p> <p>㊪ 適切なクイズを作成できた効力感を味わわせるために，できあがったクイズをグループで確認し合う。</p> <p>㊫ より適切な答えやヒントを作成させるために，できあがったクイズをグループで紹介させ合う。</p>
ふかめる	<p>くいず たいかいに むけて じゅんぴを しよう。</p> <p>6,7 読み取った内容の自作クイズへの適応 「とりを えらんで くいずをつくろう。」 ・くちばしの特徴の把握と鳥の選択 ・クイズの作成 表 裏</p> <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 200px;"> <p>さきがまがついて，ふといくちばしです。 これは，なんのくちばしでしょう。 これは，わしのくちばしです。わしは～</p> </div> </div>	<p>㊬ それぞれの関心の高い鳥に関するクイズを作成させるために，教材に掲載されている鳥の写真を複数枚準備する。</p>
ふりかえる いかす	<p>8 鳥のくちばしについてのクイズ大会 「じぶんで つくった くちばし くいずを，はっぴょうしよう。」</p>	<p>㊭ まとまりやその順序を意識させるために，できあがったクイズをグループ内で出題させる。</p>

3 指導のポイント

(1) 内容的価値

教材「いろいろな くちばし」は、特徴的なくちばしを持っている3種類の鳥に関する内容がイラストや写真とともに掲載されており、イラストや写真を見ながらくちばしの形状とその理由を考えさせることができる。

(2) 技能的価値

問いの部分にはヒントと問いが書かれ、答えの部分では答えと詳しい情報の二つのまとまりで構成されている。問いと答えはそれぞれ別々のページに書かれており、子どもたちがクイズ形式に親しめるようになっている。さらに、問いや答えに関連しているイラストや写真と文を対応させながら読み取ることができる。

4 効果的な書く活動と伝え合う活動の設定

問いと答えの二つのまとまりと、その順序性をとらえさせるために、表に鳥のイラスト、裏に問いと答えを書き込める1枚カード形式(クイズカード)に書かせる活動を、しらべる・ふかめるのそれぞれの過程に設定する。

教材文や自作クイズに、問いと答えがあることや「問い→答え」の順序になっていることを明確にさせるために、作成したクイズを隣同士やグループ内で見せ合う活動を、しらべる・ふかめるのそれぞれの過程に設定する。

5 評価規準

評価の観点	評価規準
関心・意欲、態度	身近な鳥の中から、問いと答えの順序を考えたクイズを作成しようとするができる。
理由付けの仕方	教材文同士や文と写真とを比較して、自分なりのクイズを作ることができる。
知識・技能	問いと答えがどのような関係になっているかを考え、それを生かして自分なりのくちばしクイズを作成することができる。

教師の具体的な働きかけ・評価方法

- クイズを作ることへの関心を高めさせるために、鳥に関するさまざまなクイズを出す。
- クイズをくちばしに焦点化させるために、数種類の鳥とそのくちばしを掲示する。さらに、名前を考えさせる。
- 単元後半のクイズ作成の際、くちばしに関するヒント作りがスムーズにいくよう、くちばしとその理由が比較的つかみやすい教科書に掲載されている鳥の写真を活用する。
- 子どもたちはクイズを簡単に作れると思っているので、実際に作らせたクイズを出題・解答させ、うまくいかないことから、クイズの作り方を教材を使って考えていくことを確認させる。【写真1】
- 意欲的にクイズの作成・出題をさせたりするために、教科書に掲載されている鳥の写真を多数用意し、興味に応じて選べるようにする。
- クイズには問いの部分と答えの部分があることをつかませるために、黒板に掲示された2つのクイズを比較し、共通する部分があることに気付かせ、何が書かれているかを考えさせる。また、問いの部分に赤、答えの部分に青色で囲むよう共通理解させる。【写真2】
- 問いと答えの順序性を当たり前だと思っている。そこで、教材や自分で作ったクイズ同士を比較させ、同じようなところはないか考えさせる。さらに、問題と答えの部分を入れ替えた場合、クイズとして成立するか考えさせる。【写真3】
- ㊦ 教材文が問いと答えでクイズが成立していることを感じさせたり、クイズの書き方に慣れさせたりするために、表に鳥のくちばしのイラスト、裏に問題と答えを書いたワークシートに教材文を視写させ、グループ内でクイズを出し合わせる。(作品分析)
- 自分なりのクイズをスムーズに作成できるようにするために、教材のクイズに書かれているヒントの部分の自分なりに考えさせたり、グループで紹介し合ったりさせる。
- ㊦ クイズを作成させるために、くちばしのイラストを表に、問いと答えを裏に書くことができるワークシートを準備する。(作品分析)
- よりよい答えやヒントにさせるために、形状の特徴やそうなっている理由が書けない子どもには、教材文を振り返らせたり、何を食べているかを考えさせたりする。【写真4】
- ㊦ できあがったクイズが2つのまとまりから構成されているかを確認させるために、どの部分が問いでどの部分が答えとヒントの部分であったかを発表させる。(作品分析)
- ㊦ クイズを作成したことへの楽しさを数値化させたり、その理由を記述式で書かせたりする。(自己評価)
- ㊦ 問いと答えを意識したクイズを作成できた効力感を味わわせるために、友達とのクイズのよかった点を発表させる。(相互評価)



写真1：第2時板書例



写真2：第3時板書例

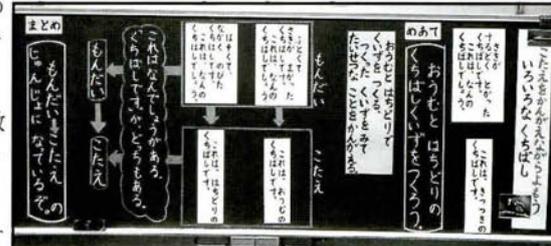


写真3：第4時板書例

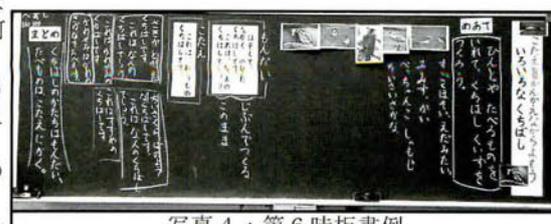


写真4：第6時板書例

IV 研究の成果と課題

これまで「自分のことばを求め続ける国語科授業の創造」の研究主題の下、効果的な書く活動を位置付け、ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導を具体化し、実践を通して研究をすすめてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

1 研究の成果

本年度の研究によって、次のような子どもたちの姿を見ることができた。

- 相手や目的などをより明確にして、自分のことばを求め続け、育成したい三つの力を確実に身に付ける子ども
- 「分かった」「できた」「相手に分かりやすく伝えられた」という効力感を味わうことのできる子ども
- 「分かりやすく伝えることができてよかった」という受容感を味わうことのできる子ども

よって、次のような成果を得ることができたと考える。

- 「ことばで伝え合う喜びを実感する学習指導」の要件を明確にしたことで、子どもの「関心・意欲、態度」を高め、「知識、技能」「理由付けの仕方」を確実に身に付けさせる学習指導が明らかになった。
- 効力感や受容感を味わわせることが子どもの育成したい三つの力を高めることに重要であることが明らかになり、学習内容を見直すことができた。

また、3年間の本研究シリーズの成果は次のとおりである。

- 「自分のことばを求め続ける国語科授業の創造」の基本的な考え方、目指す子どもの姿が明らかになり、学習内容を設定し、指導方法を具体化することができた。
- 自分のことばを求め続ける子どもは、「関心・意欲、態度」を高め、「知識、技能」「理由付けの仕方」を確実に身に付けることができることが分かった。

2 研究の課題

- 記録、要約、説明、論述などの知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力などをはぐくむための学習活動を、発達段階に応じて設定していく必要がある。
- 発達段階に応じた言語活動を行う能力を培うための学習指導を具体化していく必要がある。

《参考文献及び資料》

- | | | |
|---------|--------------------|---------------|
| ○ 文部省 | 「小学校指導要領解説 国語編」 | (東洋館出版 平成11年) |
| ○ 堀江祐爾著 | 「国語科授業再生の5つのポイント」 | (明治図書 2007年) |
| ○ 梶田叡一著 | 「絶対評価<目標準拠評価>とは何か」 | (小学館 2004年) |
| ○ 黒澤俊二著 | 「本当の教育評価とは何か」 | (学陽書房 2002年) |
| ○ 桜井茂男著 | 「学習意欲の心理学」 | (誠信書房 1997年) |